

あか ひめ くろ おうし
赤い姫と黒い皇子

おがわみめい
小川未明

ある国に美しいお姫さまがありました。いつも赤い着物をきて、
黒い髪を長く垂れていましたから、人々は、「赤い姫君」といって
いました。

あるときのこと、隣の国から、お姫さまをお嫁にほしいといっ
てきました。お姫さまは、その皇子をまだごらんにならなかったば
かりでなく、その国すら、どんな国であるか、お知りにならなかつ
たのです。

「さあ、どうしたものだろうか。」と、お姫さまは、たいそうお考
えになりました。それには、だれか人をやって、よくその皇子の身
の上を探ってもらいにしくはないと考えられましたから、お伴の人
をその国にやられました。

「よく、おまえはあちらにいて、人々のうわさや、また、どんな
ごようすの方だか見てきておくれ。」といわれました。

そのものは、さっそく皇子の国へ出かけていきました。すると、
隣の国から、人が今度のご縁談について探りにきたといううわさ
が、すぐにその国の人々の口に上りましたから、さっそく御殿にも

き
聞こえました。

「どうしても、あの、美しい姫を、自分の嫁にもらわなければならぬ。」と、皇子は望んでいられるやさきでありますから、ようすを探りにきたものを十分にもてなして帰されました。

やがて、そのものは、立ち帰りました。お待ちになっていたお姫さまは、どんなようすであったかと、すぐにおたずねになりました。

「それは、りこうな、りっぱな皇子であらせられます。御殿は金銀で飾られていますし、都は広く、にぎやかで、きれいでございます。」と、家来は答えました。

お姫さまは、うれしく思われました。しかし、なかなか注意深いお方でありましたから、ただ一人の家来のいったことだけでは、安心をいたされませんでした。ほかに、もう一人、家来をやつて、よくようすを探らせようとお考えになったのです。

「こんどは、ひとつ姿をかえてやろう。それでないと、ほんとうのことはわからないかもしれぬ。」と思われましたので、お姫さまは、家来を乞食に仕立てて、おつかわしになりました。

いろいろの乞食が、東西、南北、その国の都をいつも往来してきますので、その国の人も、これには気づきませんでした。

乞食に姿をかえたお姫さまの使いのものは、いろいろなうわさを

聞くことを得ました。そして、そのものは、急いで帰りました。

お姫さまは、待っておられたので、そのものが帰るとすぐに自分の前にお召しなされて、聞いたことや見たことを、すっかり話すようにといわれました。

「私は、つい皇子を目のあたりに見られませんでした。しかし、たしかに聞いてまいりました。皇子は御殿から外に出られますときは、いつも黒い馬車に乗っていられます。そして、いつも皇子は、黒のシルクハットをかぶり、燕尾服を着ておいでになります。そして片目なので、黒の眼鏡をかけておいでになるということです。」と申しあげました。

お姫さまは、これを聞くと、前の家来の申したこととたいそう違っていますので、びっくりなさいました。すぐに縁談を断ってしまおうかとも思われましたが、もし、そうしたら、きっと皇子が復讐をしに攻めてくるだろうというような気がして、すぐには決しかねたのであります。

やさしい心のお姫さまは、片目であるという皇子の身の上をかわいそうにも思われました。そして、お嫁にいつて、なぐさめてあげようかとも思われました。毎日のように、赤い姫君は、ぼんやりと遠くの空をながめて、物思いに沈んでいられました。すると、高い黒のシルクハットをかぶって、黒の燕尾服を着て、黒塗りの馬車に

の おうじ まぼろし う
乗った皇子の 幻 が浮かんで、あちらの地平線^{ちへいせん}を横切^{よこぎ}るのが、あり
ありと見えるのでありました。

あめ ふ ひ くろぬ ばしゃ か
雨の降る日も、この黒塗りの馬車は駆けていきました。風の吹く
ひ くろ えんびふく き おうじ の
日も、黒のシルクハットをかぶって燕尾服を着た皇子を乗せた、こ
の馬車の 幻^{まぼろし} は走^{はし}っていました。

ひめ
お姫さまは、もう、どうしたら、いちばんいいであろうかと迷^{まよ}
ていられました。

「ああ、こうして、幻^{まぼろし}にうなされるというのも、わたしの運命^{うんめい}
であろう。」と、あるときは、思^{おも}われました。

「わたしさえ、我慢^{がまん}をすれば、それでいいのだ。」と、あるときは
かんが
考えられました。そのうちに、皇子のほうからは、たびたび催促^{さいそく}が
あつて、そのうえに、たくさんの金銀・宝石^{きんぎん ほうせき}の類^{るい}を車^{くるま}に積^つんで、お
ひめ
姫さまに贈^{おく}られました。また、お姫さまは、二ひきの黒い、みごと
な黒馬^{くろうま}を皇子^{おうじ}に貢^{みつ}ぎ物^{もの}とせられたのです。

いよいよ、赤い姫君^{あか ひめぎみ}と黒い皇子^{くろ おうじ}とがご結婚^{けっこん}をなされるといううわ
さがたちました。そのとき、一人^{ひとり}のおばあさんの予言者^{よげんしゃ}が、姫君^{ひめぎみ}の
まえ あらわ もう
前に現れて申しあげたのであります。このおばあさんは、これまで
いろいろなことについて予言^{よげん}をしました。そして、みんなそれが当^あ
たったというので、この国^{くに}の人々^{ひとびと}からおそれられ、よく知^しられてい
ました。

「このご結婚は、赤と黒との結婚です。赤が、黒に見込まれてい
る。お姫さま、あなたは、皇子に生き血を吸われることとなりま
す。この結婚は不吉でございます。もし、ご結婚をなされば、この
くに疫病が流行します。」と、おばあさんの予言者はいいまし
た。